

建築討論の注目連載を読む—— ②

「ケアするまちづくり」

Featured series in KT, Part 2

Creating a Town Where No One is Left Behind

西本千尋 | Chihiro Nishimoto

1983年生まれ。NPO法人コンポジション理事/JAM主宰。各種まちづくり活動に係る制度づくりの支援、全国ネットワークの立ち上げ・運営に従事

——連載中の記事を拝読し、現行の都市計画やまちづくりではケアの視点が欠けているという強い問題意識を読み取りました。

大学に入学した2000年代、政府は官主導の中央集権ではなく、民主導の規制緩和・地方分権の時代への変換を謳っていました。私も当時はそれをポジティブに捉え、ジャパンエリアマネジメントという会社を興し、エリアマネジメント（エリマネ）の仕事を始めました。

現在もエリマネに関わる一方で、大規模な再開発をして、まちをより豊かで賑やかにし、地価を向上させることが唯一の成功というような世界観に違和感を感じるようになりました。そこで行われている経済活性化や社会の秩序維持は、自立した個人を前提とした華やかなまちづくりです。経済成長の時代はそれでよかったかもしれませんが、格差や貧困が拡大している中、そうした要求に応えるまちづくりが必要ではないかと感じるようになりました。自立しきれずにケアを必要とする人の居場所は、どこにあるのだろうか。それがこの連載を書くことになった動機です。

——私も地方創生という政策と現実のギャップには共感します。連載の具体的な論点をお聞かせください。

連載の最初の2回は、今申し上げたような、現行のまちづくりやエリマネに対する問題意識や課題について書いています。

3、4回目では住宅供給のシステムを取り上げました。収入が高くなるにつれて持家取得率が高まりますが、借家では年収200万円未満の層が5割を超え、特に若い世代では持家率が大幅に下がっているのが実態です。

こうした現状に対して公的なサービスとしては、住宅セーフティネット制度があります。これは、中古賃貸ストックを生かして「住宅確保要配慮者」に社会資源を配分しようという制度です。でも、家を探そうと検索してみると、実際には思うようには見つかりません。これではセーフティネットとは言えないのではないかと思います。

5回目は、まちづくりのなかで「ケア」を実践している千葉県松戸市の「MAD City project」を事例として取り上げています。

——MAD City projectは若手アーティストを街に呼び込むプロジェクトだと思っていましたが、ケアという視点はとても新鮮でした。

MAD City projectはJR松戸駅から徒歩圏にある空家や空室を持ち主から借りて、改装自由な賃貸住宅として低家賃でサブリースしているプロジェクトです。2010年からスタートし、運営する「まちづくりエイティブ」で初期の5年ほど私は役員を務めていました。代表の寺井元一はNPO法人KOMPOSITIONを渋谷で立ち上げ、渋谷を拠点に活動するクリエイターを支援していた経歴の持ち主です。クリエイティブな活動に機会提供するため、アートイベントなどを都内で開催していました。でもそれは短期的なものだったので、長期的にクリエイターの拠点となる住まいや活動の場を、面的に広げられる場所を展開してみようということで松戸を活動の場としました。

松戸駅周辺は、空家や空ビルが多く、エリマネの視点で見ると土地が「低利用」な状態でした。そこにいわゆる「再開発」ではない方法でどのような「まちづくり」ができるかという挑戦でもありました。

今ではまちづくりエイティブは、「住宅セーフティネット制度」の居住支援法人として千葉県から指定を受けた先のKOMPOSITIONと連携し、「ケア」を必要とする人々を対象としたサブリースを行っています。その制度利用の利点や悩みについては、連載で詳しく書いてありますので、ぜひご一読ください。

お伝えしたいのは、クリエイティブという華やかな成功の言葉によるまちづくりだけではなく、個人が「自分の人生を生きること」に対して、いい時も悪い時も伴走できるような「ケア」を包んだまちづくりが重要になっているということです。そこに、まちづくりや建築がどうしたら光を当てられるのかという問題意識のなかで連載を書いています。

聞き手
岩佐明彦（法政大学／会誌編集委員会委員長）

2022年10月20日、オンラインにて
Studio SETO＝文

